

## 理学療法の未来 クロージングシンポジウム—これからの理学療法の可能性への挑戦—

### 2 精神心理領域と女性理学療法士，2つの立場から

医療法人社団光生会平川病院リハビリテーション科 上 蘭 紗映

#### 1. 精神心理領域

本邦の全病床数の20%は精神科病床であり、精神疾患は近年5大疾病にも制定され、高齢化、複雑化、多様化する日本社会の中で非常に重要な視点の一つになりつつある。そこには予防や改善について医療福祉の力が求められている。その中で、精神科病院の高齢化している長期入院患者や、自殺未遂者が負う身体合併症、認知症などのある高齢者の大腿骨頸部骨折など、理学療法士の力が求められる場面は多くなってきている。また、2014年の診療報酬改定に伴い、認知症リハが新設されたことも、リハビリ職種に対する期待度を示していると解釈できる。しかし、まだバリエーションデータとして取り扱われることが多く、アウトカムについては明確に証明されているとは言えない。この部分に関して、10年取り組んできた内容と成果について報告し、未来に向けての可能性を示したい。

#### 2. 女性理学療法士の役割

現在、女性の社会進出に合わせて働き方も多様化してきている。一方で、制度はあっても、妊娠中や子育て中の女性理学療法士は、結果としてキャリアに空白を生んだり、働き方を変更する必要性が出るなど、働き続けることが難しくなる場面もあると思われる。しかし、職場によってはその休み中に人員補填をすることが出来ない場合もあり、サポートするスタッフの負担感も増えやすい。そういった面で、一つの職場だけを見た時にそのお互いの負担感を完全に解決することは難しいかもしれない。ダイバーシティの考え方を理学療法業界に持ち込むことは、特に病院勤務の場合は難しい面もあるが、パラダイムシフトも必要な時期を迎えていると考えている。演者は理学療法士であり、一部署の管理者であり、妻であり、乳幼児の母である。経験の中から、誰もが働きやすい職場とは、そのライフイベントや個人の能力などにより多様な働き方を受容する雰囲気づくりがまず必要で、その上で制度設計をしていく必要があると考えている。

## 理学療法の未来 クロージングシンポジウム—これからの理学療法の可能性への挑戦—

### 3 多様な疾病・障害への対応に向けて

東京大学医学部附属病院リハビリテーション部 横田 一彦

厚生労働省の人口推計によれば平成27年2月における我が国の総人口は1億2,697万人とのことです。そのうち、65歳以上の方は3,334万人、高齢化率は26.3%で4人に1人を上回る数字となっています。20年前の平成7年は14.5%、10年前の平成17年は20.2%でしたので、その進展の早さは明らかです。10年後には30%を超えると予測されています。

医学・医療の発展は、効果的な薬物の開発や安全な外科的治療を生み出し、我が国の高齢化の一つの原因であるとともに、疾病構造の変化をもたらしました。1980年代初めに死因1位が脳血管疾患から悪性新生物に代わり、その後心疾患も2位を占めるようになりました。現代ではこれらの病気の基礎疾患とも言える生活習慣病への対応の重要性が指摘されています。

理学療法の実践で患者さんに相対する時、この「高齢化」や「高

度医療（医療技術の進歩）」に関して、より複雑な疾病・障害構造を感じることも多いのではないのでしょうか。疾患自体の病勢の影響に加えて、治療の侵襲などにより全身体力消耗の激しい方も多いと思います。これらに適応し対応できるような準備をしていく必要があると考えます。障害への対処だけでなく、疾病ごとの障害の精査、疾病（治療）の特徴に応じた対処も、これからの理学療法士は行っていかなければなりません。

急性期リハビリテーションの重要性はこれまでも指摘され、多くの実践の報告がなされています。急性期リハビリテーションは目標到達までの時間的短縮効果のみではなく、生命的予後や生活の質の向上にも寄与します。今後はさらに急性期治療と並行して進むリハビリテーションが当たり前のように認知されることが必要であると考えます。